

南高百景

藤棚



南高の古い、そしてまた新たな風景を見ていこうということで前号より「南高百景」と題したコラムを始めました。2回目となる今回は「藤棚」を取り上げたいと思います。

北グラウンドの第二校舎寄りにある、その藤棚はひっそりという風情で立っています。長さ二十六m、高さが四mほどで、上部には藤の枝葉が密集して屋根のようになっており、雨風がかなりしのげるようになっていきます。グラウンドの中の丁度よい日陰となっていて、生徒たちが下にあるベンチで休憩したり、運動部の部員が集まっていたり、また昼休みにはお弁当を食べている生徒たちもいて、癒しの空間となっています。

さてこの藤棚の歴史ですが、同窓会のある役員の方にお聞きしたところ、藤は分校からのものだという事です。かつて南高は本校のほか3つの分校を有しており(香南・香北・塩江の各分校)、その中の香北分校が昭和四十年に廃止となったとき、その分校にあった藤を本校に移植しようということになりました。そして、当時在籍していた環境科学科の教員たちが中心となり、その藤を受け入れるための棚を作ったということです。以来約五十年、南高を見つめ続けてきたわけです。

前号のこのコラムにも書きましたが、私が5年前南高に赴任して真っ先に目に飛び込み、南高の心象風景となったのは時計塔のある中央管理棟でした。それと同時に二十数年ぶりに南高に帰ってきて、「ここは変わっていないなあ」と思ったものの1つがこの藤棚だったのです。私自身、高校時代には、この藤棚に対しての特別な思い出はありません。しかし「ああ、あったなあ、当時と変わっていない」という郷愁感をもみました。多くの方がこの藤棚を見ると、私と同じ感覚を共有していただけるのではないかと思います。大仰さも派手さもなければ、みんなの記憶の片隅に残っている。そのままそこにあり続けることの価値を教えてくださいな、この藤棚はそんな存在だと思っています。南高の百景の1つとして残していくものだと思います。今回のこの藤棚を取り上げました。

香友会事務局 亀田 直樹

